

使徒言行録 第7章44～53節

3週にわたって読んできましたステファノの説教も、今日で最後となりました。ステファノは最高法院に引き出され、彼に敵対する者たちの前で、旧約聖書に基づいて説教を語りました。ステファノが最高法院に引き出されたのは、使徒言行録6章11節以下によりますと、モーセと神を冒瀆する言葉を吐いた罪と、ナザレの人イエスが神殿を破壊しモーセの慣習を変えるだろうと民衆を惑わした罪で訴えられたことによります。それに対してステファノは、旧約聖書から紐解いて説教をします。説教の内容は、アブラハム、イサク、ヤコブを通じて神様が約束してくださった神様の選びの中でモーセが立てられ、エジプトの奴隷だったイスラエルの人々を解放したこと、ところが、イスラエルの人々は神様の御手によって奴隷から解放されたにもかかわらず、神様から離れてしまい、まことの神を礼拝する代わりに、自分たちの心の中にある信仰心を満たすために自分たちの手で作った偶像を拝む過ちを犯します。その結果、イスラエルの人々はバビロン捕囚として遠くバビロンの地にまで送られてしまうのですが、今日の聖書の箇所、使徒言行録7章44節以下では、神様の住まいとして建てられた神殿そのものが偶像に値するとステファノは語るのです。44節でステファノは、イスラエルの先祖がエジプトの奴隷から解放されて荒れ野をさまよい歩いているときは証しの幕屋があったと語ります。そしてそれは、44節の後半に記されていますように、「見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのもの」、すなわち、モーセに命じられた神様の思い通りに造られたものでした。出エジプト記25章には幕屋建設の指示についての記述があります。旧約聖書135ページですが、出エジプト記25章8節から9節にはこのように記されています。「わたしのための聖なる所を彼らに造らせなさい。わたしは彼らの中に住むであろう。わたしが示す作り方に正しく従って、幕屋とそのすべての祭具を作りなさい」。こうして、神様の指示に従って正しく造られた幕屋はその形のままで、今日の聖書の箇所の45節に記されているように、モーセの弟子のヨシヤに導かれたイスラエルの人々が約束の地カナンに定住した後も、ダビデ王の時代まで続いていたのです。ところが、46節にありますように、ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願います。けれども、神の住まいを欲したのはダビデの願いであり、神様の意志ではありませんでした。サムエル記下の7章5節以下には神様の思いが次のように語られています。旧約聖書の490ページです。「わたしの僕ダビデのもとに行って告げよ。主はこう言われる。あなたがわたしのために住むべき家を建てようというのか。わたしはイスラエルの子らをエジプトから導き上った日から今日に至るまで、家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた。わたしはイスラエルの子らと常に共に歩んできたが、その間、わたしの民イスラエルを牧するようにと命じたイスラエルの部族の一つにでも、なぜわたしのためにレバノン杉の家を建てないのか、と言ったことがあるか」。このように、主なる神様は、ダビデに向かって神の住まいとしての神殿を建てることを拒まれます。なぜでしょうか。その明確な理由はわかりませんが、ここでは2つのことが考えられると思います。

一つ目は、神の住まいに過ぎない神殿が、神様御自身の存在を超えて神格化されていくことへの危険性です。神殿という場所そのもの、建物そのものがありがたいものとなり、その背後におられる神様御自身が忘れ去られてしまうことに対する警告が語られています。今、世界のいたるところにパワースポットなるものが存在します。場所であったり、

建物であったり、そこに行ったらパワーがもらえとかご利益があるとか考えられているところでは。キリスト教においても、立派な神々しい神殿で礼拝する方が神様の存在をより近くに感じられるような雰囲気があります。しかし、本当にそうでしょうか。イスラエルの人々が荒れ野をさまよい歩いていたとき、それぞれの宿営地に着くたびに幕屋が立てられました。それは、移動可能であっただけではなく、簡単に出し入れできる質素なものだったのでしょう。それに比べて、荘厳な神殿を造ることによって、あたかもそこに神が住んでおられるような錯覚に陥る。そこに来なければ、神とはお会いすることができないのだと勘違いしてしまう。神殿にはそんな魔力が宿っているのではないのでしょうか。しかし、ダビデ王の遺志を継いでエルサレム神殿を建て上げたソロモン王自身は、神殿に関して次のように語っています。列王記上8章27節、旧約聖書の542ページです。「神は果たして地上にお住まいになるのでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることなどできません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です。この所に向かって僕がささげる祈りを聞き届けてください。どうか、あなたのお住まいである天にいまして耳を傾け、聞き届けて、罪を赦してください。もしある人が隣人に罪を犯し、呪いの誓いを立てさせられるとき、その誓いがこの神殿にあるあなたの祭壇の前でなされるなら、あなたは天にいましてこれに耳を傾け、あなたの僕たちを裁き、悪人は悪人として、その行いの報いを頭にもたらし、善人は善人として、その善い行いに応じて報いをもたらししてください」。ソロモン王自身がこのように語っているように、神殿は神の住まいではありません。神はそのようなところにお住まいになるのではなく、神殿とは神様がその目とその耳を置いてくださり、私たちの行いをその目で見届けてくださり、私たちの祈りをその耳で聞き届けてくださる場所なのです。そして同時に神殿は、私たち自身が神様によって裁かれる場所でもあるのです。ソロモン王がそのような思いをもって神殿を建てたにもかかわらず、神殿はいつの間にか偶像化していき、まるでパワースポットのようになり、人々はそこに来ることで満足してしまい、まことの神への礼拝を忘れてしまう。まさに、神殿という建物が、私たちをまことの神から引き離す偶像そのものになってしまうのです。

二つ目は、一つ目と関係していることなのですが、神殿という場所で礼拝を捧げることが大切なのではなく、その中身が問題なのだということです。エレミヤ書7章2節以下には次のように記されています。旧約聖書1188ページです。【主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。「主を礼拝するために、神殿の門を入れて行くユダヤの人々よ、皆、主の言葉を聞け。イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住まわせる。しかし見よ、お前たちはこのむなしい言葉に依り頼んでいるが、それは救う力をもたない。盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった異教の神々に従いながら、わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。

わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巢窟に見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。】 この箇所は、イエス様が神殿で売り買いしている人たちの台をひっくり返して追い出したあの場面でも、『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである』。ところが、あなたたちはそれを強盗の巢にしてしまった」と語っておられます。このように、神殿とは本来、寄留の外国人、孤児、寡婦のように生活基盤の弱い人たちや、無実の罪を受けた人たちのように社会的立場の弱い人たちが守られるべきところなのです。今日の聖書の箇所ではステファノは、48節以下でそのことを語ります。【けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も語っているとおりです。『主は言われる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。お前たちは、わたしにどんな家を建ててくれるというのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。これらはすべて、わたしの手が造ったものではないか。』】 ここでステファノが引用している聖句は、イザヤ書66章1節から2節に記されている言葉ですが、この2節には、以下のような続きの言葉があります。【わたしが顧みるのは、苦しむ人、霊の砕かれた人、わたしの言葉におののく人。】 主なる神様が顧みられるのは、この世で苦しんでいる人や霊の砕かれた人、主の言葉におののく人たちなのです。

さて、こうしてステファノは旧約聖書をもとに語りました。神様が選ばれたアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの約束を、モーセや他の預言者たちを通じてイスラエルの人々に伝えてきたにもかかわらず、イスラエルの先祖たちは神の預言者たちに逆らいます。それは神御自身に逆らってきたことを意味しますが、そうやって自分たちに都合のよい偶像を作り上げ、その上、本来であれば神様に祈りと行いをもって礼拝を捧げるための神殿さえも、自分たちの利益のために用いる手段としての神殿に造り替えてしまったイスラエルの人々を批判します。そしてこの批判は、今ステファノの目の前にいる人々、ステファノを最高法院に引き出し尋問をしている大祭司、長老たち、律法学者たちにも向けて語られているのです。ステファノは語ります。51節、「かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。いったい、あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者が、一人でもいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを預言した人々を殺しました。そして今や、あなたがたがその方を裏切る者、殺す者となった。天使たちを通して律法を受けたの者なのに、それを守りませんでした」。このことに関しては、イエス様御自身がルカによる福音書13章34節で、次のように語っています。新約聖書136ページです。「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」。こうして、イスラエルの長い歴史の中で受け入れられることのなかった預言者たちと同じように、神の独り子イエス・キリストもまた、イスラエルの人々から受け入れられず、殺されていくのです。

さて、このように神様が遣わしてくださった預言者たちに逆らい、そして最後には、神の独り子イエス・キリストさえ殺してしまった人々の罪を、ステファノは聖霊に逆らう罪であると語ります。そこで、今日は最後に、聖霊に逆らう罪についてご一緒に考えてみたいと思います。

イザヤ書63章8節から10節には、聖霊に逆らう罪について、次のように記されています。旧約聖書1165ページです。「主は言われた。彼らはわたしの民、偽りのない子ら

である、と。そして主は彼らの救い主となられた。彼らの苦難を常に御自分の苦難とし、御前に仕える御使いによって彼らを救い、愛と憐みをもって彼らを贖い、昔から常に、彼らを負い、彼らを担ってくださった。しかし、彼らは背き、主の聖なる霊を苦しめた。主はひるがえって敵となり、戦いを挑まれた」。ここに記されていますように、旧約聖書の時代においても、イスラエルの人々はすでに、神様の聖なる霊、聖霊に逆らう罪を犯していました。そして、聖霊に逆らう罪に関して、イエス様もこのように語っておられます。マルコによる福音書3章28節、新約聖書の66ページです。「はっきり言うておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」。ここは少しわかりにくいのですが、イエス様はここで、悪霊を追い出したイエス様の働きが、神からの力ではなく悪霊の頭の力によるのだとまちがった主張をする律法学者たちの訴えに対して行われたものです。ここでイエス様は、神の聖なる霊の働きによって邪悪な霊を追い出しているという神の働きを、悪霊の力によって追い出しているのだという悪魔的な働きにすり替えることによって、善と悪とを逆転させてしまうことに対して言及しているのです。イエス様を冒涇する言葉は赦されても、神の働きを悪魔の働きと取り替えるという聖霊に逆らう罪は決して赦されないのだとイエス様は語られるのです。これは、どういうことを表しているのでしょうか。

聖霊に逆らう罪。それは、神様の働きを悪魔の働きとすることであるとイエス様は語られます。言い換えるとそれは、神と悪魔の働きを逆転させることであり、神に逆らっている自分たちの働きこそがまことの神の働きであるとうそぶくことなのです。これは、神の独り子イエス・キリストを神に逆らう者として断罪し、そうやって本当は神に逆らっている大祭司や律法学者たちが自分たちこそ真の神に付く者なのだとして自己正当化し、自分たちこそが正しい者・義なる者であるとする。これこそが、聖霊に逆らう罪であり、決して赦されない罪なのだといエス様は語られるのです。

悪の側に付く者たちが自分を正当化し、相手を悪魔呼ばわりする。今、世界でたいへんな戦争が起こっています。そしてその影響で、私たちの生活もとても脅かされています。戦争の首謀者たちは、自分たちこそが正しく、相手がまちがっていると、お互いに相手を非難し合います。このように、自分の非を認めることなく、自分の悪を正当化し、まことの神に逆らっている自分こそが、神の僕なのだとうそぶく。これこそが、聖霊に逆らう罪なのです。アメリカのトランプ大統領はイランを攻撃する際に、これは聖なる戦いなのだと言って、アメリカの福音派の牧師たちを呼んで、戦争に勝つために按手の祈りを捧げさせました。自分の非を認めず、自分を神の側に置き、相手を一方的に悪魔と断定する。これこそが聖霊に逆らう罪なのだといエス様は語られるのです。私たちがもし、自分だけを正当化し、一方的に相手を非難して悪に定めるなら、私たちも同じように、聖霊に逆らう罪、決して赦されない罪を犯すことになるのです。

この聖霊に逆らう罪を行った者たちの手によって、イエス・キリストは十字架につけられました。そして、最高法院にいる大祭司や律法学者たちを断罪したステファノもまた、この聖霊に逆らう罪を行った者たちの手によって、石打ちの刑で殺されていくのです。

次週、私たちは受難週を迎えます。イエス様が十字架への最後の道を歩まれたその受難週に、私たちはステファノが殉教した箇所からご一緒に学んでいきたいと思ひます。

お祈りしましょう。